

近代日本における梵語学研究の展開

研究員 三浦 周

はじめに

近代仏教学の形成と展開は「歴史研究」と「文献研究」をはずして語ることはできない。脱魔術化や非神話化を志向するものが「近代」だとすれば、前述の方法論は近代化を促すものであると同時に近代そのものでもある。

ただし、欧米諸国による植民地化の危機に際して帝国主義を選択した日本の近代化は「国家」の規制を強くうける。これは仏教学も同様である。そのなかで展開された梵語学の歴史的意義を明らかにするための「研究史」構築、その一環として、本研究をおこなう。

一、プレ近代思想としてみる排仏論×護法論

「近代」の遡及的発見と非「近代」の捨象といった観点から近代仏教学の前章は富永伸基に求められることが多い。だが、富永を近世思想史の潮流から眺めれば、その言辭は排仏論に位置されるだろう。この点からすれば、近代仏教学の前章は排仏論をうけた護法論から語られねばならない。護法は幕末から昭和初期に通底するモチベーションである。これは危機意識のあらわれだといえる。そして、この危機感を媒介とした国家と仏教の利害関係のなかにあらわ

れるのが梵語学だといえよう。危機意識の産物としての梵語学は「洋才」としての梵語学とも言い換えられる。

二、近代における梵語学のはじまり

梵語学の端緒が南條文雄の海外留学にあることは言を俟たないが、こうした定型的解釈にも理由づけがなされなければならぬ。これを南條と上田恭輔との比較によってみていきたい。

南條は明治九年（一八七六）渡英、オックスフォード大学に学ぶ。上田は高橋順次郎より早い明治一九年（一八八六）に渡米、コーネル大学に学んでいる。

歴史的にみれば、ふたりは同時期に同じ言語を学んでいる。では、なぜ一方がクローズアップされ一方はオミットされるのか。もちろん、その要因は多方面から検討されねばならないが、ここでは「大学」に注視したい。

三、国家須要の梵語学

後進国であるが故に日本の「大学」は国家主導で展開された。それゆえ、いわゆる『学知』でさえも国家の軛から自由ではなかったと考えるのが自然であろう。

その反面、インド・ヨーロッパ祖語を共有しない日本において、他の諸外国語に比べて経済生産性および社会還元性の低い梵語が今日まで学としての命脈を保てたのは「大学」において、科目とされカリキュラムに則り学習された

ことによるのではないだろうか。同様に、同じ言語を学んだにも関わらず、上田が忘却され南條が称揚される原因の一端も「大学」に求められる。上田は台湾総督府に勤務しており、管見の限りにおいてであるが、梵語に関する「大学」ネットワーク上に名前があがらない。

西洋「近代」へのカウンターとしての東洋「道徳」、仏教はここに措定された。ヨーロッパにおけるインド学の盛行のみならずアジアの共通項としての仏教に国家が価値を見出したことは「大学」における梵語学の存立を担保したといえるだろう。荻原雲来『梵和大辞典』（一九三〇—）がマクドネル『梵英辞典』（一九二四）やルヌー『梵仏辞典』（一九三二）の成果を踏まえつつも、対支文化事業（外務省）の出版助成をうけ、かつ「漢訳対照」を冠することその一証左である。

小結

梵語学学習のモチベーションであった護法意識や国家が仏教に見出した価値が消失して久しい。泉芳璟や中村元が示した危機は現実化している。また、昨今の教育改革における定量的評価の安易な導入は確実に人文学を衰退させる。学振の『学術月報』No.9（二〇〇七）は「地道な古典研究は衰退の傾向にある」と報告し「若手研究者育成促進の問題」を課題として挙げている。端的に言えば梵語学は危急存亡の秋をむかえている。他領域の成果を踏まえた解釈

論・テキスト論・翻訳論といったアプローチの進展もさることながら、先に挙げた課題への対処、つまり、学習の継続的な基盤整備を行う必要がある。そして、現代において、その必然性をもつのは仏教系私立大学のみである。その実現を願いつつ本稿を了としたい。

参照

拙稿「『近代仏教学』は洋学か」「仏教文化学会紀要」二一、二〇一二。
拙稿「漢訳対照梵和大辞典」に関する一考察」「三康文化研究所年報」四四、二〇一四。
拙稿「学習される仏教」江島尚俊・三浦周・松野智章『近代日本の大学と宗教』、法蔵館、二〇一四。